

博士論文概要書『キリスト教と近代西洋政治思想』

—平和と自由と民主主義の探求—

坂本 進

1. 本論文の目的

本論文は特定の思想家を個人として微細に亙り総合的に論ずるモノグラフでも、また近代欧州西洋政治思想を網羅する思想史でもない。本論文は西洋においてキリスト教と政治倫理を共通の土台に持ち、相互に深く関連し合う三つの主題、即ち平和、自由、民主主義を探求したものである。

かつてトレルチは西洋において 18 世紀以来際立ってきたキリスト教的文化の解体を目の当たりにして、それを「巨大なる破局」と慨嘆し、キリスト教文化の見直しを通じ、ヨーロッパの「文化体系」の再建のための「ヨーロッパ文化綜合体」の必要性を唱えたが、本研究もささやかながらトレルチの主題の文脈に位置するものと言ってよい。

もとより西洋政治思想には、一方にギリシア思想の主流があり、現代に至るまでその影響は文化の隅々にまで極めて鮮明に刻み込まれているが、キリスト教的政治思想は言わばギリシア政治思想のさらにその下層に厚く堆積した地層にも似て、ギリシア政治思想と相携えて、近世から現代に流れ来たった。

政治思想、わけても本論文で採り上げる政治倫理は、宗教的なものとの関わりなしには考察不可能である。それは倫理が西洋では性質上宗教に胚胎していて、政治倫理はキリスト教を抜きにしては考察しがたいからである。

一般に思想は現在の時点で永遠なものに思いを馳せ、相対的なものよりも絶対的なものに、そして個別性よりも全体的なものへと飛躍展開しがちな性質のものである。しかし、豊かな思想も文化の多様性や民族の創造性の上に培われるもので、文化や習俗が均質化され、須らく合理性の追求のみに堕した時に、思想もたちどころに萎む。

世俗化が社会の隅々にまで浸透し、高度の科学文明が支配する現代といえども、なお文化の底辺にキリスト教が脈々と息づく西洋の地で、筆者はキリスト教の見直しにより、人間的潤いに満ちた揺るぎない社会の再来を思慕するものである。社会の無機質化の進行を多少とも食い止め、潤滑油として組織に潤いを与えるのはキリスト教を含む宗教において他に見当たらないように思われる。西洋社会を徒らに巨大化や合理化のみに専念させることなく、人間社会の原点に立ち帰り、キリスト教が西洋社会の牢固たる絆となり、不断にヒューマンな潤滑油を注入してこそ、伝統に恵まれ、活力と精神性に富み、現代に相応しい健全な社会が甦ることが期待され、その可能性を上記のテーマ、即ち平和、自由、民主主義を探求するのが本論文の目的である。

2. 本論文の構成

本論文では、キリスト教に焦点を絞り、西洋諸国の相互交流がいつそう深化し、一体化の思想が芽生えた中世にまで遡って政治思想の検証を試みる。これは合理化を指向する現在の西洋政治理論に比して重要性において聊かも劣るものではなく、21 世紀の西洋社会の

発展を占う上で貴重な試金石のひとつとなると確信する。西洋政治思想上に表わされたキリスト教の影響を考察するにあたって、私は「平和」、「自由」、「民主主義」の三つの角度から考察することとした。それは、これら三点こそ西洋社会がその達成に向けて邁進してきた政治目標であったからであり、またいずれも歴史的にキリスト教と深く結ばれているからである。そしてこれらに通底するのはキリスト教的倫理、とりわけその政治倫理であるとする。このため、私のこれまでの研究もこれら三点をキリスト教的倫理との照合の下に考察してきた。その上でこうした考察が現代の西洋政治の行く手に何を示唆しているかに論及しようとしたものである。

キリスト教的視点に絞って近代西洋政治思想の軌跡を探る主たる理由は、第一に、西洋諸国の相互緊密化の契機は、11世紀末に始まったイスラムのヨーロッパ大陸侵入に備えたキリスト教徒による十字軍の結成、およびキリスト教国の結束にあったこと、第二に、中世から近世にかけての宗教改革の時期を中心に、キリスト教徒同士の激しい争いを無くしたいという強い希望のあったこと、第三に、現実に西洋政治思想の始祖とも称すべき14-15世紀の論者はキリスト教聖職者が主流を成していたこと、第四に、ヨーロッパにおいてはヘレニズム思想と並びユダヤ・キリスト教思想が圧倒的な影響力を有していたこと、そして第五に、先に不調和に終わった欧州憲法条約に象徴されるように、その原因は西洋諸国に共通する経済的パフォーマンスの低調さにも増して、西洋社会を結ぶ紐帯となるべきアイデンティティの不鮮明さ、即ちアイデンティティ・クライシスにあって、それはキリスト教を抜きにしては考察しがたいこと、等が挙げられる。キリスト教的平和達成に向けてのキリスト教国圏実現は、等しくヨーロッパ人の胸中に去来する悲願であったからこそ、欧州統合の父ロベール・シューマンは、いみじくも西洋諸国一体化の基本構想に民主主義とキリスト教という二つの支柱を挙げたのである。彼は民主主義を基本理念に据え、専ら民主主義国家のみによる共同体を想定、キリスト教が民主主義と並んで、西洋諸国における政治倫理原則として機能すべきであるとした。本論文はこのような視点に立つもので、以下の四部15章ならびに1補章より構成される。

まず**序論**で全体構成ならびに論文の趣旨を概括する。

第一部では、**キリスト教と平和の政治思想**の関係を概観する。西洋思想はギリシア思想とヘブライ思想の二つの基盤の上に成立しており、西洋政治思想においてもこの関係は概ね同様である。即ち人間の自由・平等の追求と、理性主義を唱導してその後の政治思想の発展に多大の影響を及ぼしたギリシア思想と、キリスト教信仰、即ち天地万物の創造主としての神を基本に据え、神の似姿としての人間の創造を軸に神の愛を説くヘブライ思想であり、第一部では後者即ちユダヤ・キリスト教を主に取り扱う。

第1章では多様な**キリスト教的平和観の変遷**と現代との比較に照準をおく。キリスト教はユダヤの信仰を国際化し、普遍化(catholicize)して、ヨーロッパ人の思想形成に役立てるとともに、逐次世界中に通用する形の宗教として伝播した。しかし平和の尊さを唱導し、平和を死守するのが使命であると唱えたキリスト教にも拘らず、開発と戦争の世紀といわ

れた20世紀における戦争に参加し、主導した諸国の大半が「キリスト教国」であった。戦争を「必要な悪」、あるいは「より小さな悪」、として是認する風潮がキリスト教そのものになかったか。キリスト教の唱道する「平和」とは何か、「平和問題」はときにキリスト教に対して投じられるべき「問い」ではないか。現在のキリスト教に西洋社会における精神的支柱としての役割を期待できるか、を検証する。**第2章では、キリスト教的神秘主義と平和観**につき、クザーヌス(1401-1464)の平和思想の基本を採り上げる。ルター(1483-1546)やカルヴァン(1509-1564)に先行して歴史に登場したクザーヌスを、彼らより後から採り上げる理由は、クザーヌスの傑出した平和観にある。クザーヌスは、「知ある無知」、「対立物の一致」、「隠れたる神」、などの独創的な思考で、15世紀の当時としては勿論、現代にも十分通用する平和論を展開した。その壮大な思想体系や、宇宙的でトータルな人間思考のパラダイムは、科学技術のみが人間知能の集約でもあるかのような現代に対する警告の思想をも内包していた。それまで西洋宗教思想の主流を成していたスコラ哲学の祖トマス・アキナスの主知主義に対して、神との直接的な合意を求める立場で、原理的には救いを仲介する組織としての教会を必要としないと主張するキリスト教的神秘主義の思想をとるもので、20世紀に本筋を逸したとも思われるキリスト教の平和観を見直すのに相応しい理論と考える。**第三章では、キリスト教政治思想の系譜**につき平和実現を目指す主要な西洋政治思想を回顧する。これまでの幾多の西洋政治理論の中でも、特に非西洋世界との対峙を契機に提唱された理論は、西洋キリスト教諸国の結束により、内には永久平和の実現を目指し、外には西洋キリスト教諸国の団結により対抗することを目的としたものであった。多数の政治理論を通底する基本思想がキリスト教聖職者を中心に唱えられたキリスト教の平和観に基づく政治理論がその基礎を成すことを論証する。

第二部、キリスト教と自由の政治思想においては、自由とキリスト教倫理について論じる。欧州政治思想史において、「自由」はすでに二千年以上に亘って、極めて重く、倫理的な意味を持った概念であり、一つの絶対的な規範として、人間の行為や精神的内面性を規定してきた。人類の歴史、特に西洋社会のそれは、「自由」の探求の歴史であるといえる。「自由」とは外部の何ものからも拘束を受けない「自由」ではあるが、自らに比較を超越した倫理的拘束力を有した。こうした「自由」に打ち拉がれて「自由」を放棄することは、自らの人格の否定であり、生存者としての「人間」の資格を放棄することにもなった。

第4章では、キリスト教と自由について採り上げる。自由を考える場合、特に西洋においては倫理との結びつきが強く、自由主義政治思想においても、政治倫理との強い関連を抜きにしては考えられない。また各国の辿った歴史の相違から、自由にも各国夫々にニュアンスの差異が生じた。独立を理想とし、個々の民族が出来るだけ議会的な自治と自由な自決に達するように望む英国的自由、人権に対する意思が強く、フランス革命に象徴されるように、いざと言う場合腕力にでも訴えるほどの激しさを秘めているフランス的自由、英仏両国に対する文化的後進性から両国の後塵を拝した面も強い自由思想を持つが、概して自由は権利に存するよりも義務に存し、自由は宗教的義務感情が世俗化したものと言わ

れるドイツ的自由、等の相違がある。アメリカの自由思想との対比の下に欧州諸国が求める自由とは何か、並びに「自由」の限界について考察する。**第5章では時代的危機の認識と歴史観**についてブルクハルトの文化的統一体論を採り上げる。人間の歴史の果実たるべき「自由」と「民主主義」とが現代社会の足枷となっているとして、キリスト教とともにある伝統的進歩史観に貴重な一石を投じたのがブルクハルトである。「自由」と「民主主義」がもはや人類の抑止できぬほどの過度の文明化をもたらし、人間を進歩よりもむしろ退廃へと導いているとしている。ブルクハルトの歴史観が彩なす美と偉大さのヨーロッパで、ディスコルディア・コンコルス（調和せる不調和、多様性の中のヨーロッパの一体性）に象徴されるとする文化的統一体とは何か、忍び寄る真の時代の危機の早い認識の必要性とは何か、を考える。さらに**第6章では政治と政治倫理**と題してグローバル化とグローバル倫理観の問題を総括する。ここではニーバーとキュングとを採り上げる。宗教は社会を変革することは出来ないものの、社会に対して目を開き、その問題をしっかりと受け止め、積極的に関わり合わなければならず、その「社会的機能」は「一定の理想的視点から現実を批判すること」であり、「汚れなき理想を提示すること」により、人々に政治や社会の不正を見分ける「研ぎ澄まされた眼」を保持し続けさせることである、というのがニーバー、キュングに共通したところであり、人間は原罪をもってこの世に生を享けており、人間社会における悪の根源も原罪のなせるものとの解釈の上に成立していると主張する。歴史において人間は不断に自由を求めるが、求めた自由によって人間は不安に陥る。そして、自由のあるところに罪が芽生え、腐敗が生じる。また、ここでグローバリゼーションの進展に伴う国家共同体における政治倫理のあり方を考察する。もとより政治倫理の醸成はひとり宗教のみに俟つべきものではない。しかし宗教がその母体として大をなすものであることに鑑み、特に宗教的観点に絞り論述せんとするものである。**第7章では国家と国家理性**についてマキアヴェリならびにマイネッケの政治思想を検証する。近代に至り政治と倫理との対立が鮮明になり、この関係をどう取り扱うかが近代政治に課せられた課題となった。この課題の先駆者・マキアヴェリとともに近代西洋における国家理性の理念史が幕を開いた。このため、近代西洋の政治は国家理性の発展史、ないしマキアヴェリズム実行の歴史と言われる。彼は近代西欧における国家理性の理念の始祖と崇められ、その政治思考全体も「国家理性」にしたがった不断の思考であった。マキアヴェリ学説の本質は、政治の宗教的な道徳や普遍主義からの解放と、自律性の確保にある。マイネッケについては、併せて彼の西洋文化共同体論を論述する。かつて近代政治の発展の一翼を担った政治理念としての「国家理性」の分析を通じた、国際的な政治の広域化の有り方に関する考察への一試論である。飽くまで政治倫理的立場からの論文であり、「国益」の極大化方策や、「国益」擁護の正当化策研究、すなわち「ナショナル・インタレスト」（国益）の解明ではない。

第三部キリスト教と民主主義の政治思想ではピューリタニズムにおける共同社会の民主主義などを検証し民主主義のあり方を考察する。キリスト教に淵源を有する補完性原理を基本理念に謳うEUで、形式と建前ばかりが先行し補完性原理の原点が忘れ去られている

のではないかとと思われるからである。**第 8 章**で、**リンゼイの民主主義論**を検討する。民主主義はキリスト教精神と並び欧州統合の基本構想の二大支柱であるので、民主主義の検証は極めて重要である。トレルチの影響を強く受けたリンゼイは、特にキリスト教と民主主義との関係を捉えて民主主義論を展開した。17世紀イングランドのピューリタニズムの民主主義を中心に人間社会のあるべき姿を探る。続く**第 9 章**で**半・直接民主主義と少数意見の問題**につきツヴィングリの宗教改革を検証する。宗教改革は「エラスムスが卵を産んでルターがこれを育てた」と言われるようにエラスムスに胚胎した改革思想をルターが孵化したものとされるが、スイスの宗教改革はツヴィングリと布林ガーによって演じられた。カルヴァンに僅かながら先行し、その改革はツヴィングリの自伝として取り扱われる。ルター、カルヴァンが世界的規模で宗教改革を為したのに対し、ツヴィングリは専らスイス中心に強い足跡を残した。スイスの連邦制と半・直接民主主義、並びに多数決原理と少数意見の採用に言及、民主主義の原点を探る。**第 10 章**では**キリスト教とヨーロッパ精神**の形成につきトレルチの生命的統一論を論じる。トレルチはキリスト教と近代世界の関係を「自由と人格」、「人権とデモクラシー」などのプロテスタント的歴史文化価値に見だし、これらを人類的価値として追求して、一つの「文化圏」思想を編み出した。またキリスト教の人格と文化の倫理を通して「倫理学の再建」を企図した。ウェーバー、マイネッケとならぶウェーバー・クライスの中で、三者共通の最重要テーマとして展開した「政治と倫理」について検証する。キリスト教を歴史的な存在として把握し、その歴史的な認識と結合しながら、キリスト教を現代に再び活性化させ、その将来的な形態を形成しようとする課題に取り組んだ。**第 11 章**では**民主主義政治思想の実践**について、トマス・アクィナスの遺産ともいえる補完性原理や連邦論をキリスト教的視座から検証する。キリスト教が育んだ補完性原理の本質とその功罪、理念とした民主主義の現実政治における実現上の隘路、連邦制の導入に向かって懸念される数々の障壁等について検討する。

第四部では、**キリスト教と世俗化**について総括する。世俗化が近代高度科学文明の発達をもたらし、近代資本主義発展の礎となったといわれるが、一方では世俗化により人間生活からひとりの潤いが消失し、社会は日々に無機質化への道を辿っている。政治や経済における合理主義偏重もそうした人間社会の非人間化・空洞化を助長している。**第 12 章**で、**現代世俗化社会とキリスト教政治倫理**につき考察する。長期に亘り西洋精神の基盤をなしたキリスト教が西洋社会から次第にその地位を失い瀕死の状態にある。直接的にはルターに始まる宗教改革が契機となり世俗化がキリスト教内部から進行したことによるが、カルヴァンに端を発する労働倫理を基礎にした近代資本主義の発達は熾烈な競争の連鎖を導き、非キリスト教的ヨーロッパ文化を現出した。これはキリスト教の外部から非キリスト教化を加速したものである。西洋社会に通底するキリスト教が殆んど顧みられない現状を見据え、その理由が世界のどの地域にも増して、このキリスト教の祖国ヨーロッパにおいて世俗化がもっとも浸透していることにあることを検証する。**第 13 章**、**プロテスタンティズムの政治倫理と世俗化**ではウェーバーの職業倫理と世俗化の問題を中心に引き上げ

る。世俗化を加速したとして象徴的なのはウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。彼の説く近代的な職業観と資本主義の精神は近代資本主義の発展を促したが、その基礎となる合理主義は同時にキリスト教の世俗化をもたらした。その職業倫理は勤労と節約を通じて富の蓄積を促進したが、現世的欲望が募り、宗教の一層の形骸化をも招来した。政治に関してウェーバーは「政治と倫理とは峻別さるべし」と主張した。現実には真の政治は政治倫理を排除して実現されず、政治権力クラトスと政治倫理エートスとの拮抗と調和の上に行われる。さらにウェーバーは「禁欲による合理化と資本主義の精神の関係」を説いたが、その資本主義の精神は神への信仰の下に富の増加をもたらす反面、信仰の「腐食現象」といわれる世俗化を惹起した。そこで、**第14章、プロテスタンティズムの倫理と脱世俗化**では行き過ぎた世俗化がもたらした社会の無機質化や空洞化への反省から、再び人間社会に秩序や潤いを取り戻すべく、キリスト教を含めた宗教の意義と見直しの必要性とを検討する。そして**第15章**では現在の西洋社会に欠落している**政治的アイデンティティの形成**につき検証する。アイデンティティの象徴としての憲法の存在を望む傍ら、それと抱き合わせに厳然と存在するナショナリズム等の恐怖も手伝って、両者のパラドックスから脱却できないでいるのが西洋社会の現状である。グローバル化で濡れ拉がれた単なる市場として朽ち果てないためにも、西洋社会はもっと広いパースペクティブを必要とする。現在キリスト教の地西洋諸国においてキリスト教信仰者の年々の減少は耳を敬たせるが、西洋社会のアイデンティティの考察にキリスト教を除外することは出来ない。なお補章において欧州憲法条約草案と神の記載の問題に関する私見を述べる。

3. 本論文の意義

本論文では西洋政治思想上に見られたキリスト教の多様な影響を平和、自由、民主主義の三つの視点から辿り、これからの西洋政治の方向を探ることに努めた。殊に政治倫理の欠落した政治はいずれ暗礁に乗り上げる危険性を孕むことをプロテスタンティズムの倫理を中心に言及した。ローマの俚諺に、「道徳なくして法律は何の役に立たん」(*Quid leges sine moribus.*)と謳うが如く、倫理なきところの自由は放縦か怠惰に等しく、人間社会もいずれ荒野へと朽ち果てていく危険性を秘めるからである。

近代西洋におけるキリスト教は主要な戦争において主役を演じる傍ら、近代科学文明の下における社会の無機質化を多少とも食い止めるべく寄与した。理性の判断のみで探求する平和と自由には限界のあることや、専らキリスト教を主体とする判断にも自ずと限界のあることは自明である。理性と霊性の双方に依存する政治判断こそ望ましいものである。現に過度に進行した世俗化を新たな視点で見直そうという脱世俗化の動きが強まっている。

時代と共に情緒や感性が廃れ、無機質化が際立つ西洋社会の政治文化形成に、トレルチが主張した宗教の見直しに基礎を置く「ヨーロッパ文化総合体」の再構築にも似て、キリスト教に基礎を置く政治倫理の再構築を主張するものであって、以って殺伐たる人間社会を招来することの無きことを願いつつ、ささやかなる本論文を執筆した。以上